

九州天皇家論 3章 神武東征

九州天皇家の誕生

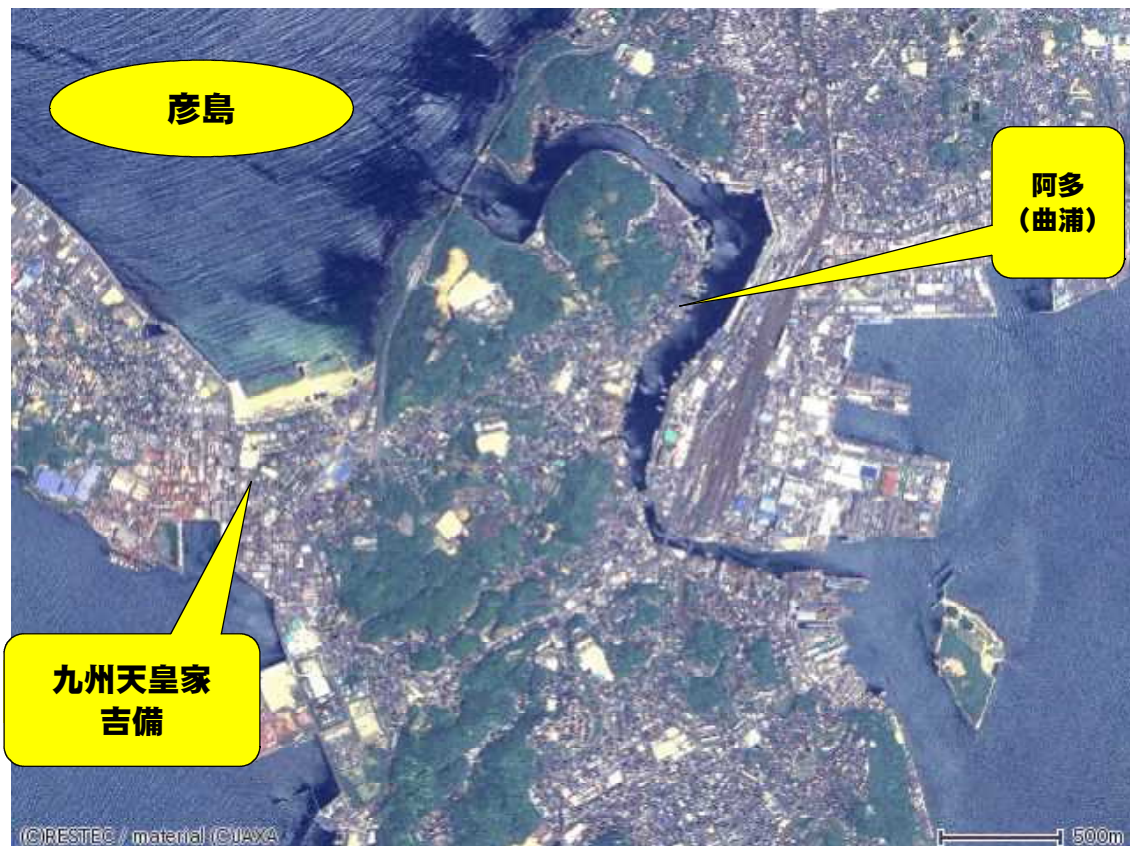
“狹井河よ 雲立ちわたい”

ところで、神武の後継を巡って争いがあったことを古事記は記している。神武は小倉北区の高千穂宮に居た時、妻を娶っていた。

故、日向に坐しし時、阿多の小椅君の妹、名は阿比良比売(あひらひめ)を娶して生める子は多藝志美美命、次に岐須美美命、二柱坐しき。

「日向」とは小倉北区である。日向は「日が向かう」という意味で西をいう。従って神武の宮は「西の宮」とも云われた。神武の最初の妻は「阿多の小椅君の妹」であった。「阿多」とは西井健一郎氏(古田史学の会)の指摘の如く、直角を意味する。「阿多」とは「曲浦(あだうら)」の「曲(あだ)」と同じである。「曲浦」は直角に曲がる浦の意で、彦島小戸の別名である。

神武の最初の妻は彦島の「阿多」の豪族「小椅」の娘であった。神武が東征を決意した時、船と兵を必要とした。神武はそれらを用意するために妻の里に向かった。神武は「阿多(彦島小戸)」の西に存在した「天(あま)」王朝の「吉備」に居た。そこに「行宮」を建てて、東征の用意をしたのである。



神武と「阿多」の「小碕君」の妹との間には二人のこどもが生まれた。「多藝志美美命」と「岐須美美命」である。やがて、東征に勝利した神武は「倭國(香春町)」に都(宮処)を定めて、新しく嫡后として「伊須気余理媛」を迎えた。そして三人のこどもが産まれた。

神武が亡くなった後、先妻、「阿多」の「小碕君」の妹の子、「多藝志美美命」は父神武の二度目の妻、つまり自分の義理の母である「伊須気余理媛」を妻とする。そして、父、神武と「伊須気余理媛」との間に生まれた三人の腹違いの弟を殺そうとする。

「伊須気余理媛」は歌でその危機を三人のこどもに知らせる。その歌が「狭井河」と「畝傍山」の歌である。歌には不安、不穏が込められている。「畝傍山」とは香春岳である。

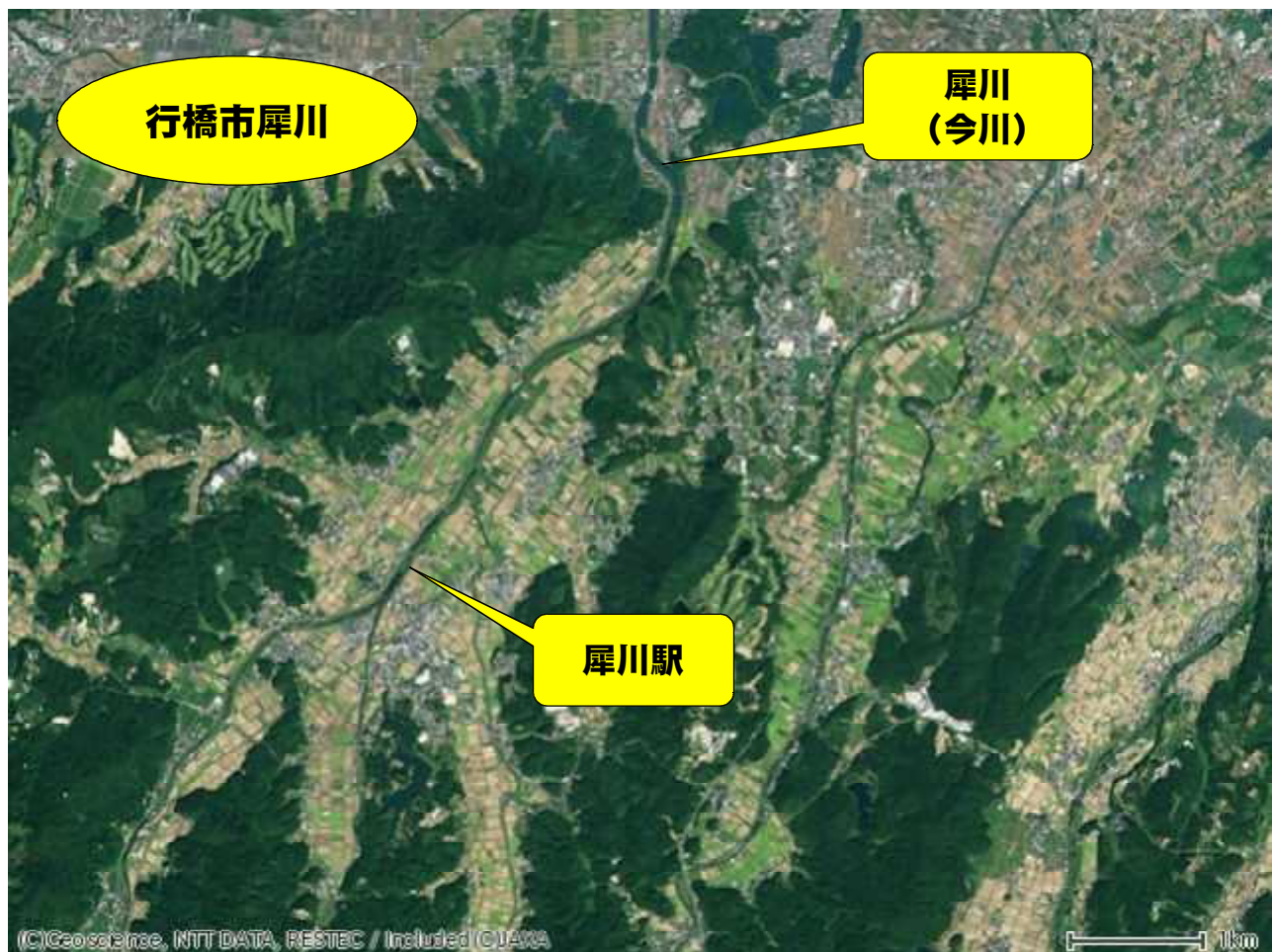
狭井河よ 雲立ちわたり 畝傍山 木の葉騒ぎぬ 風吹かんとす
畝傍山 昼は雲とみ 夕されば 風吹かむとぞ 木の葉騒げる

この歌の意を知って、三人のこどもの末の子、「神沼河耳命」が、義兄で、また母の夫である「多藝志美美命」を殺すことになる。この人が二代目、綏靖天皇である。さて、この歌のもう一つの舞台が「狭井河」である。

「狭井河」とはどこに存在したのか。特定できれば、神武の都の位置も明確になる。

「狭井河」とは現在の行橋市・今川である。この川は「犀川」と呼ばれていた。現在も地名に残る。「犀川駅」「犀川山鹿」「犀川下高屋」等々。

この川を遡れば、田川郡赤村である。支流はみやこ町と香春町の境の山、大坂山から流れ出て「犀川」に注ぐ。



「犀川(狭井河)」は神武が都を定めた「畝傍山(香春岳)」の東の都市、みやこ町、行橋市を流れる。「伊須気余理媛」はみやこ町、「犀川(狭井河)」の豪族の娘であった。

彼女の歌において、「狭井河」は「多藝志美美命」を表し、「畝傍山」は神武を表している。「狭井」とは百合の

花をいう。彼女は自分の故郷の「狭井河」に不吉な雲が立ちのぼり、夫である神武の國の象徴である「畝傍山」にも不吉な雲を立ちのぼっていると、危機を知らせた。歌舞台は香春町とみやこ町である。

神武・九州天皇家の誕生

神武が都を拓いた土地は香春町・田川市である。神武は奈良県橿原市に都を拓いたのではない。

二代目綏靖天皇から九代目開化天皇までは実在しないと云う研究者がいる。しかし、「多藝志美美命」の歌は我が子を必死に守ろうとする母の歌である。研究者の頭脳より、母の心を真実とみるべきであろう。「多藝志美美命」と神武の間に生まれた第二子、綏靖は実在した。

安寧と懿徳はどうか。安寧の陵は「畝傍山御南御陰井上陵」、懿徳の陵は「畝火山南織沙谷上陵」と伝えられる。どちらも「畝傍山」の南である。「畝傍山」は香春一ノ岳である。その南に陵墓を作ったという記述は具体的である。やはり、この二人の天皇も実在したと考えるべきであろう。

神武は、「日向(小倉北区)」、「河内國(小倉南区)」、「狭井河(行橋市)」、「倭國(香春町・田川市)」の主要國を支配下に治めた。北九州に神武の國家が誕生した。

神武を始祖とする九州天皇家がここに始まる。

